
Brain Syndrome—脳過活動症候群—

uduki maya

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Brain Syndrome―脳過活動症候群―

【Nコード】

N1676Z

【作者名】

udukimaya

【あらすじ】

西暦1990年初頭、世界に新しい病が広がった。OverActive Brain SyndromeⅡ脳過活動症候群、文字通り脳の活動が通常よりも亢進してしまう病。その病により一般人よりも脳的能力を行使できる人々は脳力者と呼ばれた。脳力を隠す少年は、いつしか脳力者同士の争いにその身を委ねていくことになる。繰り広げられる能力者同士の戦いの中で、少年が見るものは……。

人権団体と称したテロ組織や、謎の組織、警察、政府を巻き込んだ

大事件に立ち向かう少年少女の活躍に乞うご期待！

R15と残酷な描写ありをつけているのは、一応です。
基本的に全年齢に対応です。

作中に出てくる脳の話しは基本的に若干の拡大解釈を含んでいます。
脳神経の解剖生理とは異なる部分もでてきますが、そこはご了承ください。
ださい。

プロローグ（前書き）

見苦しい文書には、叱咤と寛容な心を。
評価に値する文書には、激励と戒めを。
精一杯書きますのでよろしくおねがいします。

プロローグ

西暦1990年初頭、世界に新しい病が広がった。

Over Active Brain Syndrome 脳過活動症候群、文字通り脳の活動が通常よりも亢進してしまう病。シナプスを介した脳の電気的情報伝達が過剰になってしまい、脳組織の破壊を引き起こす。多くの人々を短命に導いた病は世界に震撼を引き起こした。

しかし、OBS（英語の頭文字をとってそのように呼ばれていた）にかかった患者は破壊と同時に一つの効用を得ることになる。脳の情報伝達が通常よりも亢進することで、脳的能力が通常のそれとは比べ物にならないくらい向上したのだ。患者自身が、その向上した能力を行使し病に対する特效薬が作られたのは、OBSが世間に認知されてからわずか、3年後のことだった。それ以来、OBS患者の脳の過活動は抑えられ、健常人と同様の寿命を得ることができた。特效薬の登場で病は収束を迎えると思われたのだが、定期的な特效薬の服用を行っても脳の過活動は完全に抑えられるわけではなく、一般の人よりも活動は亢進していることがわかった。それによる脳の能力向上は抑えられることはできなかったのだ。OBS患者は、その脳の過活動に伴う超能力を保有することになり、脳力者と呼ばれるに至った。

しかし、脳力者は担ぎ上げられるわけでもなく、もてはやされるわけでもなく、重い病気の患者であり、わけのわからない能力を持っている気味の悪い障害者と世間では認知されていた。そのため脳力者はその脳力を世間では障害と識別され、ある人は同情の目で、ある人は侮蔑の目で脳力者たちを見るようになっていた。

脳力者達が世間の目を避けて生きるようになり十数年後。日本でも、脳力者達を取り巻く環境は何一つ変わることなく安穩に時は過ぎていた。まるで、激しい変容が始まる前の静寂の如く……。

出会いと気付き

2017年、4月。東京都文京区にある普通科高校では多くの生徒達がいつもと変わらない日常を過ごしていた。2年生に進級したばかりの秦野千影^{はたのちかげ}も同様であり、教室で昼食を食べたあと、ぼんやりと外を眺めていた。

「おっ、千影。宿題やってきたか？」

唐突に千影に話かけながら赤毛の少年が前の席に座り込む。その声に千影は反応し、外に向いていた視線を少年に向けた。

「ま、一応ね。孝明、もしかして――」

「へへっ。いつもありがとうございますっ！」

そういうと短髪の少年は、千影の言葉を遮ってノートを取り上げた。

「……しょうがないな。でも、たまには宿題やってこないと、テストあぶないよ？」

「わかってるよ。でもでもでもっ、とりあえずは差し迫っている危機を乗り越えるのが先なのさ」

そういうと、赤毛の少年は教室の正面を向き、ノートを写すのに躍りになった。

だらしなくルーズな性格と、赤毛という模範生からは程遠い外見ではあるが、屈託のない笑顔はどこか憎めない。千影もいつものことだと呆れていたが、小さくため息をついて再び教室の窓の外を見た。外は雲ひとつない青空だったが、千影と呼ばれた黒髪の少年の心はどこか晴れなかった。長めの前髪に遮られたその視線は窓下に広がる校庭を越えて、遠い遠いビル群の果てを眺めていた。



「いやー、助かったよ、千影！ あいつ俺を目の敵にしてやがるから、しつこいのなんのって。なあ？」

「単純に順番が廻ってきただけじゃないか。この前は笠間で終わってたから次の木戸孝明きどたかあきに当たるのなんて予想できるよ」

「なんだよ、感謝してんだからそんなのどうでもいいじゃんか！」放課後、二人は下駄箱を出て校庭を突っ切っていた。下校の際は正門に向かうため皆この場所を通る。正門まで延びた人の列は蟻の行列のようだった。

「千影はこのあと暇か？もし暇ならちょっと付き合えよ。いつものお札にジュースくらいは奢るぜ？」

そういうと孝明は立てた親指を進行方向に向けてポーズを決めた。一体いつの時代に生きてきたのだろうと千影は顔をしかめたが、あえて突っ込むと面倒といった面持ちでそこは流した。

「あ、別にいいけど。どうせいつもの所に行きたいんでしょ？」

「まあな。あそこは俺の聖域、最後のアイドル、心ちゃんが待っているんだよ！あの愛くるしい瞳、すらっとした身体、胸を突き刺すような歌声、どれをとっても今まで出会ったことのないくらい最高の美少女だ！」

話す口調が徐々に大きくなっていき最後は校庭全体に響き渡るような大声を上げていた。高々と上げた拳は天を向いており、降りる気配すらない。その様子に周囲の生徒達は訝しげな目で見てくるがそれは全く気にならない様子だった。

「わかったから。さっさと行ってさっさと帰るよ。俺は」

孝明は根っからのアイドルオタクであり、いつも放課後はグッズが売っている直売所に顔を出している。心ちゃんというのは、このあたりで活動をしている所謂ご当地アイドルといったものだった。入学当時から比較的仲のよかった孝明にむりやり連れられていた千影にとって、こんなことは慣れたものだった。

「ほんと、アイドル好きさえなんとかすればもてそうなのにな、孝明は」

苦笑いを浮かべて孝明を見るが、その目はもうすでにこれからたどり着く店内を見つめているようだった。

程なく正門を抜けて歩道にでる。ここから10分も歩けば孝明の目指す店にたどり着き、馬鹿な話をしながら帰途に着くはずであった。しかし、その日は予定通りいかなかった。校門を出て少し歩くと後ろから少女の悲鳴と怒号が聞こえたのだ。

「きゃー、何なの、こいつ!？」

「待てこらーっ! 下着泥棒っ! 誰か捕まえて、そいつ泥棒でーすっ!」

二人はその声に振り返る。それと同時に二人の横をサングラスとマスクを付けた見るからに怪しい人間が走りすぐ横を通り過ぎた。そして、それを追う二人の女子生徒は息を切らし、正門のあたりで立ち止まっている。

「おいつ、今のが下着泥棒か!？」

孝明がその男を目で追いながら声を上げる。

「それっぽいね」

走り去る男の後姿を千影は落ち着いて眺めていた。

二人の姿を見るや否や、下着泥棒を追っていた女子生徒は二人に詰め寄った。

「ちよっと何やってるのよっ! 追いかけてよ! あいつ下着泥棒なんだって! 何ぼさっとしてるの?」

「いや、ちよっと待ってよ。今からじゃ走っても追いつけないし、そういうのは警察にまかせー!」

「なによ、だらしなない! お願いだから捕まえてっ!」

女子生徒は涙目になりながら千影に迫っていた。しかし、対する千影は顔を背け目を逸らしその猛追から逃れようと身体をねじる。

「おい、千影。困ってるんだしそういう言い方は――」

孝明が千影に話しかけ場を収めようとした刹那、四人の間に風が吹き抜けた。

それと同時に下着泥棒が逃げた先で鈍い悲鳴が聞こえる。

悲鳴の方向に視線を向けた四人が見たものは、倒れている怪しい男とそれを踏みつけている女だった。その女は、助けを求めた女子生

徒と同じ制服を着ていた。

その女は遠めからもわかるくらいスタイルがよく背が高い。茶色い髪の毛をポニーテールにし束ねておりすらりと伸びる足は男に突き刺さっている。倒れている男を蹴り上げて一瞥すると、女は正門に向かって歩き出した。

「ありがとうございますっ。ほんと助っ……」

「あ……」

お礼を言い走り出した女子生徒たちは女の顔が見える位置まで近づくと途端に声をつぐんだ。

「本当にありがとうございます」

「ありがとうございます」

恐る恐る女に近づき盗られた下着を受け取りしまい込むと、感謝の礼も早々に校内に向かって走り出していた。その顔は犯人を捕まえにくれたことに対する感謝の表情などではなく、ひどく怯えている。女はその様子を特に気にする様子もなく正門に向かう。

千影はそのやり取りを見て訝しげな表情を強めた。

「ねえ、孝明。どうしてあの女子生徒さっさと戻っていったの？ せっかく犯人捕まえてくれたのに」

「おい、千影、お前知らないのか？ あの女、五十川茜いそがわ あかねだぞっ？」

「五十川茜って……同じクラスの女子だろ？」

「そうだけど、違うって！ 五十川はこの辺じゃ有名だぞ？ いいか。あいつはこの辺りを締めてた不良グループに去年突然乗り込んで、壊滅させたのを皮切りに、絡んでくる不良を次から次へと黙らしちまうんだ。あの蹴りでな。どんなに多党を組んで追いかけても、速すぎる足に追いつくことも出来ない。目を合わせたら最後、電光石火の早業でこの町から消えることになる。巷では光速の鬼姫とまで呼ばれている危険な奴だ。そして、この学校唯一の脳力者だよ」

「脳力者……」

孝明は声が漏れないよう千影の耳下で話しかけていた。

「だから、関わり合いにならないほうが無難だって。知らん振りし

ていくぞっ」

そういつて孝明は千影の腕を掴んで前へ進もうとする。……するが、何かに遮られて進めない。

「あれ、なんか前にある……？」

孝明が顔を上げると目の前に茜が立っており孝明を鋭く睨み付けていた。

その目はひどく冷たく、整った顔はその迫力を増進させていた。

意志の強さが伝わるようなアーモンド形の目には、年相応の幼さが少し残っている。

「邪魔なんだけど、どいてくれる？」

感情を含まないセリフが孝明に浴びせられる。その迫力に無言で道を譲った孝明のことは誰も責められないだろう。

その様子を同じく無言で見っていた千影が茜を見ながら孝明に声をかけた。

「そんなにびびらなくてもいいんじゃない？ 走る姿が見えないわけじゃないんだし」

「ばか、さっきだってあの女が動いてるの見えたか？ 見えなかったら？ それだけ速いしそれだけやばいんだよ」

「そっか、そうなのかな」

「そうなのかなって、お前なあ。まあとにかくやばいやつなんだから気をつけろってことだよ」

「わかったよ。でも今日のことは孝明的には嬉しいことだったんじゃないの？ 女子生徒の下着を拝めたんだからさ」

「下着って、そんなのどこで見るんだよ……」

「そういうながら孝明は千影を見ながら首を傾げる。

「あつ、それは……そうだよ！ 女子生徒が受け取るときに見えちやっただよね。孝明は見えなかったの？」

「みえなかった……。くそ、お前だけ」

そう言ううと孝明は悔しそうに顔をゆがめる。見えないところで千影は汗を拭った。

「そんなことより、はやく店にいかなくていいの？ 時間おそくな
っちゃうよ」

「おおっ！ そうだった。心ちゃんっ、待ってろよ！！」

そう言うと、孝明は再び拳を掲げて空にまだ見ぬ心ちゃんを描く。

千影は安心したように苦笑いすると、まだ日の沈まない町へと歩いていった。

しかし、千影は気付かない。その後ろでは強いまなざしが向けられていたことを。

掴みあいは音楽室で（前書き）

この話から脳の話がちよこちよことでてきます。

脳の部位や働きについては大まかなものを参考にはしていますが、若干拡大解釈をしたり事実とは異なる部分もあるかと思いますが、そこはご了承ください。

掴みあいは音楽室で

「ちょっと来て」

千影はその言葉の意味をよく飲み込めていなかった。考え込んでる間もなく、腕をつかまれ引きずられていく。掴まれた腕が痛む。掴んでいる手はとても細く、滑らかに伸びた指はかなり華奢にも関わらず抵抗できなかった。

「ちよつと、待てつて。えつと……五十川さん、だよね？　なんで急に俺は連れて行かれてるのかな？」

「いいから、こっち来て」

淡々としたしゃべり口調とは裏腹に茜は強引だった。

朝、千影が登校してきたと思ったら教室に現れ、周囲の注目お構いなしに千影を連れて行ったのだ。いや、この場合さらっていったのほう正しいかもしれない。

「ここならいいわね」

そういうと、茜は千影を音楽室まで連れてきていた。

朝なのでまだ誰もおらず、薄暗い音楽室には二人の影が静かに浮かび上がっている。

円らな瞳でじっと見つめられてしまい、千影は視線の置き所に困り宙を仰ぐ。

その瞳は徐々に千影に近づき、動揺を誘った。

ふわりと甘い香りが千影の鼻をかすめ、目の前にいる美少女から意識を逸らすことは出来なかった。

その刹那、茜は千影の胸ぐらを掴みさらに顔を近づけた。

その手には力がこもり、千影の呼吸を妨げる。

「なっ——」

「ねえ、あんた。もしかして脳力者？」

その質問に千影の顔は一瞬強張るも、すぐにその腕を跳ね除け距離をとった。

「げほっげほっ……、いきなり何するのさっ。それに脳力者って君のことでしょ？俺には関係ないじゃないか」

むせた呼吸を整えながら、茜を睨み声を絞り出した。

「そうよ。私は前頭葉の運動領野のOBS。噂になってるかもだけど、下半身の筋力強化が脳力よ。超短距離ならば、一般人が気付けない速さで動くこともできるの……。でも、不思議よね。あの時私は気付けないくらいの速さで動いてたはずなのにどうしてそれをあんたは知覚できたの？あの口ぶりだと見えていたんでしょ？」

千影は目を見開いて茜をみた。そしてすぐに視線を外し下をみる。

「っ……」

「馬鹿な友達で助かったわね」

そういうと茜は繕ったような小さな笑みを千影に向けた。

対して千影の表情は曇り顔をしかめた。

「そして、もう一つ。あんた、あの時盗られた下着がどうのって言うってたわよね？」

茜は笑みを正しもう一度千影を睨みつけた。

「下着を返すとき、私は周囲に見せないように気をつけたし、あの子たちもそうだったわ。そうになると、あんたが下着を見れたのは、下着泥棒があんたたちの横を通り過ぎたときだけ。それも一瞬の出来事だったはずだけど」

「いや、そんなはずは——」

「私、最初から見てたのよ。だからわかったの」

千影の視線は動かない。静寂が再び訪れる。

埒があかないと思ったのか、広がった距離を縮めようと茜が一步を踏み出す。

しかし、それを静止するように千影が声をかけた。

「俺が脳力者のわけないよ。どこにでもいる一般人だって。ばかばかしい。もういくよ？」

長い前髪をたくし上げながら、茜を鼻で笑い出口へと歩いていく。出口のドアに手をかけたかと思うと、千影の後ろでドンツという音

が響いた。

その瞬間、ドアにかけた千影の手は茜によって掴まれる。数メートルの距離を一瞬でなかったものにしていたのだ。

千影は驚きで声がでない。驚愕と畏怖の目で茜を睨みつけていた。

「今のは私の――電光石火――^{スピードスター}。この脳力の前に逃げ出すことなんかできないわ」

「君は何がしたいんだ？」

千影は動かず問いかけた。

「あんたの脳力、私のためにつかいなさい」

「は？」

千影は呆気にとられ間拔けな声を挙げた。ドアから手をはなし、茜と向かい合う形になる。掴まれた腕も自然と解けた。

「あんたの脳力、おそらく視覚系でしょ？ その長い前髪はおそらく、視力を操るときの水晶体の動きを隠すため。脳力の程度にもよるけど、使えるわ、それ」

その言葉に千影の表情が消える。空ろになった視線を茜に向けつぶやいた。

「君もその手のタイプか……」

「え、何？ 聞こえないんだけど」

茜の問いを無視し顔を上げ今度は大きな声で宣言した。

「俺は脳力者じゃないけど、それでもいいなら協力してもいい。ただし、一つ条件があるんだ」

「条件……？」

訝しげに感じたように茜は眉間にしわをよせる。

「君の自慢の足を使っているから、もう一度俺の腕を掴んでみて？」

それができたら言うとおりにする。もし逆にできなかったり俺が君の腕を掴めたら、もう一切俺に構わないで」

「はっ、何その条件。簡単すぎて欠伸がでちゃうわ」

茜は失笑し小ばかにする様子で肩を竦めた。

「条件をのむのか、のまないのかどっちにするの？」

「いいわ。でも後悔しないでよ？ 一瞬で勝負ついちゃうんだから」
そういうと薄ら笑いを浮かべ、千影を中心に円を描きながら歩き始めた。

2、3歩、歩いたかと思うとその姿が大きな音と共に消える。

同時に千影に対して真っ直ぐ距離を詰め、その腕に照準を合わせ近づいていた。

が、その軌道にもう腕はなかった。

腕を掴めず千影を通り過ぎてしまった茜は、背後から左腕に向かって切り返した。

しかし腕は掴めない。

再度千影を通り過ぎ立ち止まる。

（ありえないっ）

千影に背を向けたまま茜は驚愕していた。

今の動きに茜は1秒もかけていない。

普通の人では反応すら出来ないレベルのはずだった。

しかし千影にはタイミングよく掴む瞬間にぎりぎりの動作でかわされていたのだ。

茜の見立てでは千影は視覚系の脳力者であるため、動きが見えてい
るだろうとは思ったのだが、ここまで鮮やかにかわされるとは思っ
ていなかったのだ。驚きだった。

（見えているってのは相当厄介ね。今は動きの勢いで掴みにかかっ
たからかわされたけど、それなら……）

考えをまとめると間を置かずに、再び足を踏みつけ動き出す。

しかし、茜の腕は空を切るだけ。

動きの中にフェイントを交えてもそれは意味をなさなかった。

（それならっ）

茜は腕には向かわずに、足に向かって蹴りつける。

体勢を崩してから腕を掴もうと考えたのだ。

しかし、その蹴りも空を切る。

猛追の勢いを止めることはなく、千影に向かうも結果は変わらない。

茜はいい加減腕を掴めずあせりが見える。その矢先――

「きゃっ」

茜の動きは止まっていた。

空を切った茜の腕を千影ががっしりと掴んでいたのだ。

「これで俺の勝ちだね。約束は守ってよ」

短くそう告げると千影は静かに腕を放し音楽室から出て行った。

残された茜は両手を握り締め、奥歯を噛み締め動けずにいる。

さっきまで怒涛のように鳴らされていた床の音は余韻として音楽室残り、それが消え失せていくほど茜の顔は徐々に猛り、目に見えて紅潮していた。

三人目の脳力者

(失敗したかな……)

千影は頭を抱えたため息をつきながら教室への道のりを歩いていた。彼女――五十川茜の脳力に真っ向から対抗してしまったのだから当然の感情だ。

普段は怒ることなどなく温厚な彼だが、茜が唯一触れられたくない部分に触れたのだから冷静でいられるはずもない。

先ほどの攻防からわかるとおり、千影も脳力者の一人だ。後頭葉、有視野のOBSであり、視覚能力の向上という脳力を持っている。しかし、その事実が周囲の誰にも漏らさないよう配慮しながら今まで生きてきたのだ。

千影の背は170cm程度と高校生の男子としては平均的であり、体格も比較的痩せ型ではあるが一般的。元々性格もそれほど派手ではなく、唯一特徴がある目は長い髪で隠していたから千影個人の印象はどちらかというと薄いほうであろう。

大きくはつきりとした目は誰もが引き込まれるほどの魅力を携えてはいたが、それも髪の毛を伸ばすことと千影の努力である程度隠すことができていた。

地味であるという自らの持っている特性を活かし、人目につくことを避け、自分の秘密を隠し通すことに尽力した成果が、ここにきて崩れ去ることになったのだから千影の落ち込みは多大なものだった。教室に戻り、クラスメイト達と雑談を交わし日常に戻っても、彼の憂いは晴れることはなかった。

千影が自分の机に突っ伏していると間もなく茜が入ってくる。千影は今まで意識することはなかったが、入ってきた茜に対してクラス中の皆の意識が集中し直後にクラスの雰囲気がい様なまでに静まり返る。それは、茜に対する恐怖と無関係を装うという態度そのものだった。これが世間一般の脳力者に対する代表的とも言える反応

だった。千影が事実を隠していた理由の一部はこういった世間の目があったのだ。

（これはひどいな。いじめにあってる小学生みたいじゃないか）
千影はそう重いながら苦虫を潰したように顔をしかめた。

対して差別的な感情を向けられた茜は無表情で自分の席に座る。その動作に動揺はなかった。

先ほどとは違う憤りを千影は感じていた。



次の日、千影はやっと慣れてきた自分の椅子に座りながらも異様な居心地の悪さに苛まれていた。後ろからの視線が痛い。

（すごい見てるよ。振り向けない……）

茜が後ろからものすごい形相で睨みつけているのだ。

その様子は周囲にも影響を与え、殺伐とした空気が教室に漂っていた。

「なあ、お前五十川になんかしたのか？」

怪訝な顔を浮かべ孝明は千影へ耳打ちした。

「いや、何も。下着泥棒騒ぎがあったあと少し話ただけだよ」

真実は話せない。嘘を言わずに事実を包み隠しながら千影は友人に説明をする。

「なんでもいいから、怒らせてるのは間違いないって！ お前のことずっと睨みつけてるぞ？ 心当たりがあるなら謝っちまえよっ」

その言葉には、早くこの空気をなんとかしてくれ、という懇願の意味がこめられていたのだろう。千影を焚き付けるように背中を叩いた。

（参ったなあ。これほどまでに敵意むき出しだななんて……）

千影は頭を抱えて机に突っ伏すしかできることはなかった。

そうしている間に始業時間が過ぎ、教室に担任の先生がやってくる。そこまではよかったのだが、その教師の後に見慣れない女子が

一人くつついてきていることに気付き教室がざわめいた。

「ほらっ！ 静かにしろ。」

そういうと両手を叩き、生徒達の意識を自分に向ける。

「ホームルームを始める前に転校生を紹介する。ほら、来なさい。

……彼女は如月雪葉だ。きげんしゆきはずっとアメリカに住んでいて、その移住手続きにすこし手間取ったためみんなには少し遅れての仲間入りになってしまったな。ほら、自己紹介を」

先生に促されると如月と呼ばれた少女は一步前に出て軽く会釈をした。

落ち着いた様子でクラスを見渡し息を吸い込む。

その息で声が紡ぎだされるかと思いきや、雪葉はその期待を大きく裏切った。

歌ったのだ。

それも、尋常ではないくらいの美しい歌声で。

細くガラスのように繊細な印象の声はだんだんとその芯の強さを露にし皆の胸にしみこんでいく。波打ち際のさざ波のように聞こえても、気付いたときには大海の奥底のような深みに包まれた妙な感覚に皆魅せられていった。

小さい身体から伸びる細い手足。腰まで伸びる絹のように滑らかな黒髪。雪のように白い肌。整った顔立ちに丸くはつきりとした目。

歌声に加えその美しい外見も合わせて、クラス中の皆が雪葉に見惚れていた。

わずか数十秒の間だったが、その歌声が止んだ後もその余韻を打ち砕くものはだれもなく、教室が静けさに包まれていた。

「はじめまして。如月雪葉です。歌を歌うためにアメリカに行っていました。が家庭の事情で日本に住むことになりました。どうぞよろしくおねがいします」

再び会釈をすると教室中に拍手が沸き起こった。

それは歌声に対する賞賛と歓迎の証。しかし、それも長くは続かなかった。

「私は、前頭葉、運動性言語中枢のOBSです。脳力は――超絶歌唱^{ビューティフルディ}。皆さんよろしく願います」

OBSという言葉聞いた瞬間にクラス中が驚きに包まれ拍手は止んだ。皆の意識に刷り込まれている差別という名の防御反応が途端に顔を出す。

その反応に首を傾げていた雪葉だったが特に気にした様子もなく言われた席についた。

徐々に教室は正常を取り戻していったが、千影と茜は二人して目を見開いて雪葉を見つめていた。その視線に含まれる感情は、敵意でも羨望でもなくただ驚きだけだった。

はじめは距離を置いていたクラスメイトも、雪葉の持つ独特な魅力に惹かれていき昼休みには机の周りをクラス中の皆が取り囲む形になり質問ぜめにしていた。その質問は転校生に対しての質問もあったが、多くは普段あまり関わりをもたないOBSという病気についてのことが多かった。

「その脳力って使おうと思うと使えるものなの？ 疲れたりとかってするのかな？」

「やっぱり最初は意識を集中させないと使えないかな。でも段々と慣れてくるとそんなに疲れないでやれるけどやっぱりずっと使っていると頭が痛くなってきちゃう。そこまでは普段することはないけどね」

「ねえ、如月さん。あの歌はさっき言ってた――超絶歌唱――《ビューティフルディーバ》って脳力を使って歌ってたの？」

「そうよ、歌うときは意識しなくても脳力を使えるように訓練したの。あの歌声はその脳力のおかげってことになっちゃうかな。でも私もがんばって歌ってるんだよっ」

「他にもできることってあるの？」

「うーん。理論的にはできるんだろうけど……それをやっちゃうとね。一応病気だからさ」

……………。

朝の教室の空気とは打って変わって賑わいを見せている。

今まで学校唯一のOBSであった茜に対する対応とは完全に真逆の反応であり、皮肉にもそれは茜がもたれてきた印象がOBSによるものではないと言われているかのようだった。

茜自身が醸し出す空気はなんら変わっていないのだが、それを押し殺すほどの雪葉の空気が教室中に満ちていた。その日の話題は雪葉一色になっていた。



放課後千影は一人で下校していた。孝明は例の如く心ちゃんを求めて町に繰り出してしまっていたのだ。今日は握手会があるらしく、下校のチャイムが鳴った瞬間にその姿は忽然と消えていた。

千影の家は学校から20分程歩いた所にある。もちろんそれなりの距離があるしバスでも電車でも使える交通機関はいくつかあるのだが、あまり学校の人たちと顔を合わせたくないがためにいつも歩いて登下校をしていた。そして、その道程にある大きな公園も、歩いて登下校する一つの理由になっていた。公園には木々が生い茂り小さな池には渡り鳥が羽を休めている。その周りには散歩をしている人が多くおり、隣にある広場では子供達が走り回り汗を流す。そんな日常を気負いなく眺めているのが好きだった。自分には手に入れないものでも、ここにいればそれを感じることができる。千影にとってそれは慰めにも似た感情であったが、それが嫌ではなかったのだ。

千影は今日もいつものように缶コーヒーを買ってベンチに座る。一人で帰るときの日課のようなものだった。土とコーヒーの香りが混じり一日の疲れを癒してくれる。

「隣、いいですか？」

不意に声をかけられる。珍しいことだな、と見上げるとそこには今日の話題の人、如月雪葉が立っていた。

「えっと……」

「雪葉です。はじめまして、千影様」

そういうと満面の笑顔を浮かべ千影の横に隙間を空けずに座る。

千影はその状況が理解できず顔を紅潮させ固まっていた。人とあまり関わることのない千影にとって美少女の身体に密着するなどといった経験はなく、どうしていいかわからない。

「どういうこと？ 俺達始めて会ったと思うけど……。それに様って……」

動揺した千影を見て微笑むと雪葉は顔を近づけて話し始める。

「それはですね、千影様。私、あなたのお母様にアメリカでお世話になっていたのです。あなたも知っている通りもう亡くなられていますが……。」

「母さんのっ!？」

千影は予想外の人物の登場に驚き、身をたじろげた。

「そうです。生前、お母様から頼まれて私は千影様の助けになるようにと言われていました。その準備がやっと整ったので日本にこれたのです。これから、よろしく願いますね。千影様」

そう言うのと千影にさらに顔を近づけて微笑む。ゆっくりと近づいてくる顔との距離を保つために千影は背を反り顔を遠ざける。

「私は千影様のためにここにきました。だから、なんだってして差し上げます。なんでもですよ」

そういうとかわいらしい笑顔の中に妖艶な笑みが生まれる。

その表情に千影の鼓動は早鐘を打つ。年頃の男子ならそう言われて多くのことを想像しないわけがない。

瑞々しい唇と黒く輝いた真珠のような瞳が千影の視界に埋め尽くされる。思考は停止し、雪葉の誘いに抗えない千影がそこにいた。千影の身体に雪葉はまたがりその密着度を上げていた。

まさに、互いの唇が重なるかというところで、鋭い叱責の声が突き刺さる。

「あんたたち、何やってるわけ!? 会っていきなりだなんて馬鹿

なんじゃない？」

その声に驚いて振り向くと、そこには腕を組み蔑みの目で見下ろしている茜が立っていた。

途端に現実に戻された千影はベンチから立ち上がり、視界は宙を漂った。

「別に何もやってないって。話をしてただけだよっ」

その言葉に雪葉も茜も釈然としないといった面持ちで、しかめっ面をしている。

「そんなことより、なんの用？ 五十川さんは俺にはもう関わらないはずじゃない？」

その言葉に茜の顔の引きつり具合はさらに増す。

「あんたに用があるわけじゃないわ。そっちの女に用があるのよ。同じOBSとしてね」

自分を指名された雪葉はゆっくりと立ち上がり茜と相對する。先ほどのまでの笑顔はなくその顔は無表情そのものだ。

「あら、私はあなたに用はありません。千影様とのことを邪魔しないでいただきたいのですが？」

「あんたOBSなんでしょ？ だったら協力しなさい。私にはやらないといけないことがあるの」

「あらそうなんですか？ 私はそんなの関係ありませんが。私の意志をもし理解できたなら、ここから消えて下さる？ 独活の太木さん？」

馬鹿にしたようなその物言いに茜は弾かれたように雪葉に詰め寄った。

「いいから付いて来いって言うてるのがわからない？」

「その下品な顔を私達にさらさないでと言っているのがわからないかしら？」

周囲の空気が張り詰める。

その重さに耐え切れなくなった千影は二人に割って入った。

「ちょ、ちょっと待った、二人とも。周りの人が見てるって。ほら

落ち着いて。ね？」

千影の言うとおりで周囲の子どもや老人は遠巻きに諍いの様子を傍観している。

三人とも制服だから、何か揉め事を起こしたらすぐ連絡が行ってしまっただろう。

それを察したか二人は離れとりあえず場の空気は落ち着いた。

「申し訳ありません。千影様。私としたことが、ご迷惑をおかけしてしまっ」

そういうと雪葉は千影に深々と謝罪をする。

茜はそれを眺めながらあきれたようにため息をついていた。

「もう今日はいいわ。とにかくっ、あんたたち二人とも気に入らないけど、OBSとしての力、絶対に手に入れて見せるから」

そう言うのと踵を返して消えていった。

災難が去ったと一息ついた千影を尻目に、雪葉は邪魔者が去ったと嬉々とした顔で千影の顔を見つめていた。

「あ、俺もそろそろ行くね。如月さん」

雪葉の重々しい視線に気付いた千影は早々にその場から立ち去ることを選択した。

「千影様っ？ 私これから――」

「また明日っ。じゃあね、気をつけて帰ってね」

雪葉の言葉を遮ると、小走りでその場から逃げ出した。

その様子にふて腐れたように頬を膨らませた雪葉だったが、すぐにその表情を笑みに変え千影と同じ方向にゆっくりと歩いていった。

始まりは日常の中で

千影は朝から浮かない顔をしていた。別に、朝寝坊をしたとか体調が悪いといったことでは断じてない。多くの生徒達から注目を浴びていたせいだ。そして、その注目を浴びる原因となっているのが、両脇にいる二人である。雪葉と茜だ。

事の起りは昨日の夜からだった。公園での揉め事の後、千影は夕食の材料をスーパーで買って自宅へと向かっていた。千影は親の残してくれた家に一人で住んでいるため、家に灯りは付いていないはずなのだが、その日は違った。家には千影を出迎えるようふに灯りが煌々となっていたのだ。

（おかしいな。叔母さんは様子を見に来るだなんて言ってなかったし……）

千影は窺うように玄関のドアをそっと開ける。

そしてその視界に入ったものに千影は言葉がなかった。

「な……」

「お帰りなさいませ。千影様っ」

そこには、制服に白いフリルのついたエプロン姿の雪葉が立っていたのだ。

くると一回転すると、エプロンとスカートがふわりと浮かび、白い太腿が露になる。再びこちらに向くとスカートの両端を軽くつまみ、満面の笑みで淑女のようにポーズをとった。

いるはずのない人がいたことと、その光景に見惚れてしまったことが重なりドアを開けたまま動けずにいる千影を不思議に思ったのか、雪葉は首を傾げながら近づく。

「何をやっているんですか？千影様っ。早く中へお入りになって？ほらっ」

そういうと、千影の腕を両腕で抱えて中に引っ張った。その際偶然にも（？）成熟途中の柔らかな膨らみが腕に密着し千影に動揺が走

る。

「ぼっ、何すんだ！？っていうか、どうして如月さんがここにいるの？ここ、俺の家だよっ？」

慌てて腕を振りほどいた千影は疑問に思っていることを問いかける。「わかっております。今日からこちらでお世話になることになっている雪葉です。よろしくお願いしますね？」

そう言うと、再び笑みを浮かべて近くへよってきた雪葉を千影は必死になって避け家の中に入った。

「晩御飯は今からお作りしますので、ゆっくりしててくださいね」慌てふためいている千影を気にかける様子もなく、雪葉は当然のようにキッチンへ入っていく。

「ちよっと待ってよ。どうしてここにいるかちゃんと答えてくれなйтつ」

その質問が聞こえているのかいないのか、雪葉は包丁とまな板を使い均一なリズムを奏でていた。

「ちよっと、如月――」

「あなたのお母様が亡くなられてからもう1年が過ぎました。千影様がお母様と別々にお過ごしになってからは5年ほど経ちますでしょうか。千影様とお母様が離れ離れになった頃、私はその頃からお母様のお世話になってきました。」

唐突に話し始めた雪葉の声は柔らかだがどこか張り詰めている。表情こそ変わらないが、今までの様子とは違っていた。

「私はOBSの立場が日本よりも幾分ましなアメリカにいましたが、それでも差別の対象として孤立しておりました。住む場所も転々とし、施設にいるところをお母様の研究の関係で一緒に住むことになったのです」

「母さんと住んでたのか……」

「はい。もちろん仕事のことがなければ一緒にはいらなかったでしょう。それでも、私は今までの人生とは全く違う時間を過ごしました。誰かに必要とされ名前を呼ばれ、自分の力が役に立つという

ことも知りました。そして千影様のことも……」

「俺のこと……」

雪葉の言葉に千影は顔をしかめる。

それに応ずるかのように、一定のリズムで奏でられた音は止んだ。

「ええ。いつも千影様の話をされていました。どんな人でどんなものが好きなのか。いいところもだめなところも、いっぱい知っています。あなたのお母様から聞いたんですから……。そして、お母様がなくなる前、最後までお母様は千影様のことを心配しておられました。お母様の中では千影様は5年前のままの印象だったのでしょうね。微笑みながら千影様のことを私に託してくださいました。どうか、千影の力になってほしいと……」

雪葉が話し終わると静寂が訪れる。考え込む千影の目を、真っ直ぐに見つめる雪葉。その瞳は透き通っており、揺らぐことはない。その瞳の力に耐え切れず千影が目を逸らしたとき再び雪葉は語りだした。

「ですから、私は千影様のお力になれるよう、今日からお世話させていただきます。どんなことでも、どんなときでも、千影様のために私はなんでもいたしますわっ」

さっきまでの張り詰めた空気は解き放たれ、再び雪葉は料理を始めた。

（母さんのことだからな。逆らっても無駄か）

千影は小さなため息をつき、苦笑いを浮かべる。その顔には諦めにもいた表情が見て取れた。

「ねえ、鍵は母さんからもらったの？」

「そうですよ」

「そうか。わかったよ。仕方ない……。君も巻き込まれた側なんだね……。今日からよろしく。如月さん」

千影はあきらめたように片手を差し出すと、雪葉は頬を膨らませて上目遣いで睨んだ。

「えっ、どうしたの？ 如月さ——」

「さつきからっ！如月さんなどといった他人行儀な呼び方ではなく、雪葉とおよび下さいっ！そうでないと、もう返事して差し上げませんっ」

そういうと雪葉は目をつぶりそっぽを向いてしまった。

（弱ったなあ。女の子を名前で呼び捨てなんて小学生以来だよっ）

千影は顔を真っ赤にして小さく声を絞りだす。

「……は……しく」

その声が聞こえていたのかいないのか、雪葉は薄目を開けて千影を一瞥する。

「なんておっしゃったの？」

「……もうっ、雪葉っ！これからよろしく！これでいいだろうっ！？」
茹蛸のようになった千影をみて満足したのか、雪葉は差し出された手を握り返す。

「こちらこそよろしくおねがいますっ」

天使のような微笑が千影を襲った。

こういった経緯で千影と雪葉は一緒に住むことになった。雪葉が食事を作っているときに千影は叔母に電話したのだが、叔母曰く「そういうことだから。よろしく」と至極あっさり一緒に住むことを容認された。日本では自分と同じく叔母が後見人になっているらしい。

（前もって話してくれよな。いつも適当なんだから。叔母さんは）
電話をきったあと頭の中で文句を言いつつ、現状を飲み込もうと躍起になった。

久しぶりの一人ではない食事は、とても美味しかった。

次の日、千影は誰かに会ってはいけないと思い別々に登校することを提案したらその提案は即座に拒否された。

「私が傍におりませんと、千影様を守れません」

と、上目遣いで睨みながら千影に食い入る。逸らしても逸らしても

目の前に入り込んでくる雪葉の視線は小動物のように可愛く、それが必死なのだから男の感情としては逆らうことは難しい。千影は渋々一緒に行くことを容認するしかなかった。そして、家から出たところをたまたま近くに住んでいた茜に目撃されるだなんてことは、誰にも予測ができなかったはずだ。

そこからは無言の圧力が千影を襲う。千影の右腕に終始しがみついている雪葉もそれを助長させているらしかった。千影に理由はわからなかったが、左斜め後ろからの圧力は学校まで陰ることがなかった。

こうして両脇に対照的な美少女を携えることになった千影は、周囲からの羨望と嫉妬の眼差しと比例して、気分を落ち込ませていくことになったのだ。



「千影っ、お前どういことだよ!?! 一日でなにがあったんだ? なぁ!?!」

昼休みになり貴明は涙目になりながら千影に詰め寄る。肩を掴む両手は震えており必死さはみてとれた。

「いや、俺も正直あんまり把握してないんだよ。頭が痛い」
両腕で頭を抱えてへたり込む千影。

「あら、千影さま。大丈夫ですか? 保健室に行かれますか? あっ、それならつまらない授業なんか休んでしましましょうか」
そう言いながら雪葉は甲斐甲斐しく千影の世話始める。

「だーっ! だからなんなんだ、その甘い関係はっ! いつからそんな手が早くなったんだっ」

孝明は理解できない状況に両手を上げてただ叫ぶしかできなかった。
「そんなんじゃないんだけどな……。昨日以上に五十川さんからは敵視されているし……」

千影はそういうと貴明に目配せする。

「たしかに。あれも何をやったんだ？　と聞きたいが、お前は自分から争いをするようなやつじゃないしな。よくわからないが昨日以上の剣幕だ……」

茜のいる方向に誰も目を向けられなかった。当然だ。元々恐れられてた茜が殺気をむき出しにして敵意を隠すことなく教室にいるのだから仕方ない。昨日からそうだったのだが、今日はそれをより研ぎ澄ましたような威圧感である。

「でも、美人に構われるんなら、俺はなんだって羨ましいぞっ」

そういうと、孝明は椅子に座り再び涙を浮かべた。その様子に千影は怪訝な顔をする。

「あれ？　孝明は心ちゃん命だろ？」

「ああ、それはもういいんだよ……」

貴明は侮蔑の視線を何処か遠くに向けるとあざ笑うかのように顔を歪める。

「いたんだ……」

「えっ？　何が？」

唐突に呟かれた言葉にすかさず千影は問いかけた。

「だから、心ちゃんには彼氏がいたんだよっ！　なんでもジョニーズとかいうアイドルと付き合ってるみたいでさ。そんなふしだらに恋したわけじゃない！　そう思って傷心登校してきたというのに、千影……お前ってやつはーっ！」

そう言うとき貴明は瞼にたまった大粒の涙を垂れ流しながら千影の髪の毛を無造作に掴み乱しはじめた。

「俺は、本当になんでもないんだって」

千影は何を言っても孝明は聞くことはなかった。

しばらくしてようやく貴明が落ち着くと、途中から無言を貫いてきた雪葉はおもむろに立ち上がった。

「どうしたの？　ゆ、雪葉……？」

千影が問いかけるも反応はない。よく見ると顔には表情がなく、あ
る一点をみつめていた。

そしてゆつくりとその対象に近づくと氷のように鋭く言葉を発する。
「その頭が悪そうな独活の大木さん？ いい加減千影様に失礼じやありません？ 不機嫌極まりない醜い視線を千影様に向け続けるなんて。言いたいことがあるならおっしゃったらいかが？ あなたは駄々をこねてる幼稚園児か何かですか？」

「なっ!？」

そう言い放たれたのは茜だった。予想だになかった言葉に教室全体の声が詰まる。

千影も孝明もその行動には驚愕し、身を硬直させるしかできなかった。

「あら？ なんにもいえないのかしら？ その胸についている有り余った脂肪のせいで脳に栄養がいかなかったのかしらね。まあ、不愉快な顔を私達に向けなければいいんですから、そのまま下を向いてすごしてくださいさる？ 乳女っ」

そこまで聞くとやっと怒りが行動にたどり着いたのだろう、勢いよく茜も立ち上がり雪葉を正面に見据えて睨みつける。対して雪葉はうつすら歪んだ笑みを浮かべたまま冷たく眺めていた。

「あんた、さっきから聞いてれば何様のつもり？ 私は大木でも乳女でもないわよ！ ただね、目障りなのよ、あんたたち。あんたたちだってOBSでしょ？ 身の程をしれっていうのよ！」

茜は憎しみをぶつけるが如く罵声を浴びせる。

「あら、それは貴方だって同じでしょう？ そんなこともわからないのかしら乳女は。」

「だからその乳女ってのやめなさいよ！ あんたなんか全然胸なんかないじゃないっ！ どうせ洗濯板みたいな貧相なもんだからあたしの胸に嫉妬してるんでしょ！」

「そんなものはいりませんわ。私は心も身体も千影様に捧げていますの。だから、今はまだ至らない胸もきっと千影様はゆつくりとご自分の手で育ててくださいますわ。あなたなど、乳でも搾られて使い捨てられるのが落ちですわよっ」

「なっ、育ててもらおうとか、さっきからいやらしいのよ、あんたたちのはっ！　っ……もう我慢できない、あんたたち二人ともちよつと表にでなさい！　その腐った神経たたきなおしてやるっ」

「望むところですわ」

そういうと二人は教室の外に出ようと足を踏み出す。

あまりの勢いに呆然としていた千影はその事態のまずさに咄嗟に身を乗り出した。

「ちよつと待ちなつて、二人ともっ！　そんなことしたってしょうがないよ」

二人の前に立ちはだかり両手で行く手を阻む。

千影の腕を茜が払った。

――その刹那、どこからともなく爆発音が学校中に響き渡り、廊下側の窓ガラスがはじけ飛ぶように割れる。

「きやああああっ」

「千影様っ」

教室に響くガラスの碎け落ちる音、悲鳴、叫び声。

それが落ちて着いた直後に学校中が騒がしくざわめいた。

千影達も同様であり、咄嗟に身を翻した茜と雪葉は特に大きな怪我もなく割れたガラスを見つめている。

「なんなんだよっ、これ」

体中に降り注いだガラスの粉をはたきながら引きつった顔で孝明が叫ぶ。

「みんな、怪我は！？」

千影は周囲を見渡すと飛び散ったガラスで切り傷を作った生徒はいるが大きな怪我をおっているものはいなかった。

「千影様、お怪我は？」

千影に駆け寄りながら雪葉が問いかける。

「あ、大丈夫。雪葉はどう？」

「私は大丈夫ですわ」

状況が飲み込めず皆、周囲の観察につとめていた。

「ちっ、早すぎるっ」

茜は小さく呟くと両拳を強く握り締めていた。

その呟きは周囲のざわめきで聞こえない。

「ちよっと、あんたたち。こうなったら問答無用で来てもらおうよ」
そう強く言い放つと、千影と雪葉の手をとり教室を出る。

「えっ？五十川さん、なんなの！？　こんな状況だし動かないほうが……」

「いいからっ、今度はちゃんと説明するからいいから来てっ」

「なっ……」

茜の素早い動きに雪葉も文句を言えずただただ従う。

「あ、孝明、もし先生来たらちよっとごまかしといてっ」

「あ、ああ……」

「頼むっ」

そういうと、あっというまに姿が見えなくなった。

3人が消えた教室では、孝明と他のクラスメイトが惨状の中立ち尽くしている。

拙いながら早くも日常の感情を取り戻し始めた人々は怪我がないことに安堵し散らばったガラスの片付けを始めた。

その空気を拒絶するようにOBSの三人は外へでる。張り詰めた神経が緩まないように。

遠ざかる日常に気を馳せながら、千影は止まることのない胸騒ぎに身をまかせた。

戦いの警笛

「ちょっと、五十川さんっ。どこにいくの？」

千影と雪葉は茜に引っ張られて廊下を走っていた。何も言わずに走る茜の表情は引きつっており、絶えず周囲を伺っている。

「どこに行くかなんてあたりまえでしょっ？ この爆発があった場所よ。おそらくこれは『空の社』の仕業……。私がいるのに勝手なんかさせないんだからっ」

「空の社……、それってOBSの人権向上を謳っている人権団体の主力なものの一つでしたっけ？」

雪葉は少し考えたあと、おぼろげながら思い出した団体の概要を茜に問いかけた。

「表向きはね……っと、あんたたち、そろそろ自分達で走ってよ、引っ張るの疲れたわ。あ、それで、その空の社ってのは人権向上を謳っているのはあんたの言うとおり。ただ、その方法はあまり世間には知られていないわ」

茜から開放された二人は後ろを走りながら茜の声に耳を澄ます。

「それってもしかして……？」

「テロ活動、もしくは暴力行動による権利の訴えよ」

冷たく言い放つ茜とは対照的に、容易に想像がついた答えを言葉で聞いて、千影の顔は青ざめる。

「なんであなたがそんなこと知っているのかしら？そしてなんで爆発があった場所に私達は向かっているの？」

当然の疑問に大きく千影が頷いた。その問いに不敵な笑みを浮かべると声を張り上げて茜は答えた。

「私は警察の中の組織、OBS特別対策課に所属しているのよ。そして、これから私達三人でこの爆発を起こした犯人を捕まえるのよっ！」

その答えに千影は慌てて口を挟む。

「ちょっと、犯人を捕まえるって。俺達は別に――」

「静かにっ。うるさいわよっ。……いたわ」

千影の言葉を遮ると、両手で二人を制止した。

茜が示す先は学校の中庭。そこには一人の女が立っていた。

いくつか並んでいるベンチの後ろには木々が植えてあり、植木に囲まれた空間はある程度の広さをたもっている。女はその植木の奥からちやうど出てきているところだった。

その女は三人のいる方向に視線を向けており、ゆっくりとこっちに歩いてきている。

金髪の長い髪はウェーブがかかっており一步一步歩くたびに揺れ、その揺れと同調して大げさに膨らんだ胸元も揺れる。

大きく谷間が見えているタンクトップに皮のジャケットを羽織り、ダメージ加工されたデニムのホットパンツ、腕には沢山のアクセサリをつけており、金属音が足音と和音を奏でていた。

「あら、珍しいじゃない。楓んとこの糞ガキ。嫌な奴に会ったわね」
そういうと金髪の女は茜を見ながらそう呟いた。

顔が見えるまで近づくと、その女がとても美人なことがわかる。欧米人らしくほりの深い顔に切れ長の瞳は髪の毛と同じ色だ。
見るからに不愉快そうな表情を浮かべ舌打ちをする。

「邪魔すんじゃないわよ。今日の仕事は終わったんだから」
そういうと茜を睨みつけ言い捨てる。

「馬鹿言わないで。私が通ってる学校をこんなにしてただで帰すと思うの？ 相変わらず脳みそ足りてないわね。サラ・ブレイク」

「ガキが生意気ね」

サラと呼ばれた金髪の美女は、茜の言葉に反応し両拳を音になるほど握り締めた。

サラの周囲の空気の密度が変わる。

「ちよっと、五十川さんっ。そんな挑発するようなこと言わなくて……。この窓やったのあのなんだろ？ 危ないよ、逃げないとっ」

千影は茜に呼びかけるが、その訴えは茜には届かない。

代わりに鋭い睨みが千影を襲った。

「何言ってるの？ 私達の学校が襲われたのよ？ あんたむかつかないの？ 大事な友達達が死んでたかもしれないのよ。犯人を目の前にしてよくそんなことが言えるわね。あんたそれでも脳力者？」肩を竦ませた千影を見てあきれたように視線をサラに戻した。

そのままの視線で今度は雪葉に話しかける。

「そっちの女も何もできないの？そこにいる大事な大事な腰抜けを守らなきゃいけないんでしょ？ 少しは力を貸しなさい」

雪葉が茜の言葉に顔をしかめる暇もなく、茜は視界から消えた。

否、千影以外の人物の視界からだが。

地面を蹴る大きな音は、戦いを知らず警笛となった。

歪んだ笑み

茜の地面を蹴る音とほぼ同時に、その体はサラの後ろに回り込んだ。踏み込んだ左足を軸に体を回転させると、そのまま茜の右足はサラの横っ腹に食い込む。

「ぐつつつ！」

骨の軋む音とうめき声が中庭に響く。

立て続けに頭、膝元に蹴りを打ち込むとサラの身体が地面に沈む。

（いけるっ）

姿勢が崩れたのをみて茜はサラの正面にまわった。

今までよりも大きく溜めを作り右足をサラの顔に蹴りこむ。

サラの体が5mほど後ろに飛ぶと、茜は攻撃を始める前に吸い込んだ息を大きく吐き出した。

「五十川さん、すごいな……」

千影がそう呟くと、雪葉は少し表情をしかめる。

「あれだけ大口を叩くのですからあれくらい当然ですわっ」

二人とも言葉を交わしながらも意識は吹き飛んだサラに向いていた。茜は警戒する姿勢を崩さない。

仰向けに倒れていたサラはゆっくりと起き上がり歪んだ笑みを浮かべていた。

「ガキンちよが……少しは成長したみたいね」

何事もなかったようにサラはゆっくりと茜に向かって歩き出している。

（ちっ、だめか）

その様子をみて茜は眉間にしわを寄せた。

「相変わらずあんたの攻撃は軽いね。どうせ無駄なのに必死になって馬鹿みたい」

「無駄かどうか、試してやるわよっ」

茜は叫び、再び足に力を込める。

フェイントを交えつつ、縦横無尽に走りぬけつつサラの身体に蹴りを打ち込んでいく。

サラの身体には無数の擦り傷や打ち身ができており、見るからにダメージが蓄積されていく。

「どうよっ、あんたなんか、もう私にだって倒せるのよっ」

そう呟きながら茜は止めの一撃をサラの側頭部に向けて蹴り出す。その刹那、千影は茜に向かって叫んでいた。

「だめだっ」

茜の耳に声は届いていたがもう動作を止めることは出来なかった。迷いを振り切りながらより自分の足に力を込めて振りぬく。

しかしサラの頭に足が届く寸前の所で茜の足の動きは止まっていた。サラに掴まれていたのだ。

「さっきからちよろちよろと。蹴りの軌道にパターンがないのよ、鬱陶しい」

「五十川さんっ」

千影の悲痛な叫びが中庭に響く。

「もっと成長してから会えればよかったのにね」

歪んだ笑みを浮かべた表情が、悪意でより歪む。

足を掴んだ腕を自らに引き寄せながら、サラの血管の浮き出た右拳がうねりをあげて茜の顔を目指す。

茜の顔が悲痛の叫びをあげ、なぐられたその体は後方へ飛び校舎の壁に打ち付けられた。

音もなく崩れ落ちる身体には力は感じられなかった。

虹色の調べ

「五十川さんっ！」

力なく倒れこんだ茜に二人は駆け寄った。

「五十川さんっ、大丈夫？ 起きてっ！」

千影が体を揺ると茜はゆっくりと目を開ける。

「うるさいわね、大丈夫よ、これくらい。どきなっいつ」

体を起こすため腕を地面につくと、茜は痛みに顔を歪める。

「みせてご覧なさい。……ちよっと、千影様。この腕、折れております……」

雪葉は顔を引きつらせ小さく呟く。

サラの攻撃を受け止めた左腕を見ると赤くはれあがっており、すでに逆の腕よりも見るからに太くなっていた。

「大丈夫よ。いいから私を立たせて」

折れていない方の手を膝に添えながら茜は必死に立ち上がろうとする。

「無茶だよっ！ そんな腕でっ！」

「なら、あんたがあいつをつかまえてくれるわけっ？」

「どうしてそんなになってまで……」

「いいからっ、立たせて！」

鋭く睨みつける茜の視線から千影は弱々しく目を逸らすしかなかった。

その様子を見ていた雪葉は腕を掴んで茜を立ち上がらせる。

「あいつの情報을 いただけますか？」

その言葉をきき茜は口角をあげる。

「ようやくやる気？ まあいいわ。あいつはサラ・ブレイク。私と

同じ、前頭葉、運動領野のOBSよ。あいつは腕力の向上が主な脳

力、剛腕鬼姫よ。私一人じゃまだ敵わない……」

そう呟くと、茜は悔しそうに顔をしかめる。

「あら、いい心がけですわね。自分の無力さを認めるなんて。」

「仕方ないでしょ。冷静にならないとあいつを捕まえることなんてできない。私が行くからサポートしなさいよ。できる？」

「誰に物をいつているの？」

そう告げると二人は互いに微笑み合う。

サラは遠くで三人を見ながら叫び声をあげていた。

「なにやってるの！？ どうせ骨なんかばきばきに折れているんでしょう！？……ああ、あの感触……何度味わっても気持ちいいわ。」

もっと味合わせてよ、人が壊れる瞬間をつ！」

サラが高らかに叫ぶ。

「ちっ、この人体破壊快楽者がっ」

茜が苦々しく言い捨てる。

ゆっくり立ち上がったが左腕に走る痛みは薄れない。

痛みをこらえるように歯を食いしばると意を決したように茜は声を発した。

「いくわよっ」

片腕をだらりとたらしながら、茜は再びサラに向かって走り出した。
(あいつに私の攻撃がきいていないわけじゃないはず。少しずつダメージを蓄積させていけば必ずっ)

打ち身や擦り傷ができていることを考えるとその考えはあながち間違ではない。

しかし、ダメージを蓄積させていくこと事態が今の茜には難しかった。

左腕を骨折した痛みで走るスピードが激減し、ヒット&アウェイを行おうにも先ほどのスピードについてきたサラの前ではまた捕まり攻撃を受けてしまう。

茜の脳裏にもその考えが浮かび、いざ攻撃を仕掛けようにもできないでいた。

サラの周りを飛び回りながら何か手はないかと考える。

(玉碎覚悟か……)

そう茜が思っていた矢先後ろから声が響いた。

「行つて。あなたは私に何を頼んだのかしら？」

雪葉の声。

先ほどとは違い、一緒に戦ってくれる人がいるのはなんて心強いんだろう。

茜は否定するだろうが、確かにこのとき茜はそう感じていた。無意識に。

雪葉の言葉を信じ、サラに攻撃を仕掛ける。

鞭のようにしなる足がサラの腹部へ向かう。

（バカがつ。何度も同じ手が通用するって思ってるなんて甘ちゃんだね）

サラの手がさっきと同じように茜の足を掴みにかかる。

その瞬間――

キイイイイイン

「なっ!？」

頭に突き刺さるような高音域の音が中庭に響くとサラの身体は瞬時に硬直した。

その隙に茜の足はサラに幾度となく突き刺さりその身体は横に飛ぶ。起こったことが理解できなかった茜は、サラとの距離をとり驚いた表情で雪葉を見つめていた。

すると雪葉は少し自慢げな様子で茜に目配せをしてから千影に向かって振り向いた。

「私の脳力は一つではないんです。ビュティフルディーバ超絶歌唱は見世物用。本当の脳力レインボーボイスは七色美声。ビュティフルディーバ超絶歌唱も今見せた高音刺激ノイズトーンも七つあるうちの一つ

でしかないんですの」

そう言うとき雪葉はかわいらしく千影に微笑みかけた。

虹色の調べ（後書き）

主人公はいつ活躍できるのでしょうか……。
先は長い。

迂闊な男

「あんた、いったい……」

雪葉の脳力を目の当たりにして呆けている茜にサラの叫び声が木霊する。

「ふざけるんじゃないよっ！ 餓鬼どもがあっ。必ずぐちゃぐちゃにしてやるんだからっ」

茜の蹴りのダメージを受けたせい、呼吸が乱れ口からは血が滴っている。

ゆっくりと立ち上がると、その刺激のせいで咳き込む。

怒りに満ちたその表情はオーラルレイカー剛腕鬼姫の名に恥じず、まさに鬼の様な表情だった。

「私の高音刺激はうまくいけば数秒ですが意識を断絶しますわ。ただ、一人に対してしか私が音を発せないのが難点ですが……。意識

がない状態で蹴りを受けたあの下品な女は無防備な状態だったのでかなりのダメージを受けていると思われるわよ。あの様子だとうまくいったようですわね」

雪葉は自らの能力を解説しながら千影に向かって笑顔向け続けている。

千影はサラの様子をみて言葉を飲み込んでいた。

女子二人で腕を折るほどの怪力を持つ人間を追い詰めている。その事実には驚愕していた。

「二人とも、すごいね……」

拙い笑顔を雪葉に向けると、雪葉は元々浮かべていた笑顔を何倍にもして喜びを表した。

その直後にサラに身体を向けると表情を戒める。

「きますわね」

その言葉に千影は身体をびくつかせる。

「そっちのちびっこい女あ、あんたもOBSなのか？ 邪魔だから、

その肉も骨もぐちゃぐちゃにしてあげるわよっ、がはっ、はっ」
サラは鬼の形相のまま歪んだ笑みを浮かべる。

「あら、あなたこそ虫の息ではなくて？ その顔。醜いを通り越してあきれますわ」

雪葉はそう言うと言とサラを睨みつける。

「なんだと……。この小娘がっ！ 死ねええっ」

雪葉の言葉に逆上したサラは怒りの咆哮をあげると、雪葉の元に走り出した。

雪葉はひるむことなく微笑むと、喉の辺りに手を添えて高音刺激ノイストーンを発動させる。

しかし、その直後雪葉の表情は一変、驚きの表情になった。

サラは意識を断たれるどころか、スピードを上げて突進してくるのだから。

「どうしてっ」

雪葉は喉にあった手を口に当てると、理解できない状況に立ちすくむ。

もう目の前までサラは迫っていた。

「死ねっ——だめっ！！——」

「雪葉っ」

後ろに立っていた千影が叫ぶ。

その刹那、目の前に吹き飛んできたものに身体ごと押されて、千影自身も後方へ吹き飛び中庭の茂みに突っ込んでいた。

「いってて……」

千影は吹き飛んだ衝撃をそのまま背中を受けて顔をしかめた。

痛みに耐えて、乗っかっていた重さを払いのけ目を開けるとそこには雪葉と茜が倒れていた。

「雪葉っ、五十川さんっ!？」

慌てて呼びかけても反応はない。気を失っているようだった。

「また、どこか壊れちゃったかなあ。あははははっ。反応があったほうが面白いんだけどね。仕方ない。ゆっくりいたぶるとするか」

振りぬかれた腕を慣らすように回しながらゆっくりとサラが近づいてくる。その顔には再び笑みが生まれていた。

「雪葉っ、五十川さん、起きてっ！ 大丈夫？」

声をかけながら千影は近くに転がっていた茜の肩を揺する。

「いっ……ううっ」

呻く茜の様子にひるんだ千影はすぐに茜を元のように寝かせた。視線を下に移すと、そこには不自然な方向に折れ曲がった茜の足が見える。

「なっ、足も……」

千影の顔から血の気が引いた。そして、今起こったことを理解した。茜は雪葉を庇ったのだと……。

その推測は当たっていた。サラが雪葉に殴りかかるその瞬間に、茜は雪葉の前に抱えつけサラの攻撃を受けていた。

サラが怒りに我を忘れた状態であり、その攻撃力は最初に受けたものよりも上だと判断した茜は、自らの一番力の強い部分でその攻撃を受けることでダメージを最小限にしようと考えたのだ。

その判断自体は正しかったのだが、受け切れないほどの威力だったのは誤算だった。殴られたまま茜は吹き飛ばされ後ろに立っていた雪葉と千影を巻き込んでいた。

「ゆ、雪葉はっ!？」

千影が慌てて雪葉を見ると、雪葉は外傷は見当たらずただ気を失っているようだった。

そのことに多少安堵した千影はすぐに自らの絶望的な状況に気が付いた。

「あら、坊や。その二人のお友達？ 一緒に壊してあげるから、ちよっと待ってなさいね」

顔を上げるとサラが満面の笑みで自分達を見下ろしていたのだ。

途端に身体が硬直し汗が吹き出る。

口は渴き焦点は定まらない。しかし動かない身体とは対照的に、その思考は目まぐるしく働いていた。

（あれ、俺どうしてこんなことになってるんだ？ 爆発があつてガラスが割れて……あれ？）

サラは茜の真横に立ち、苦しんでいる様子を眺めている。

（骨を折るなんて人間じゃない。何なんだよっこいつらは。巻き込まれただけなんだよ、俺は）

何かを呟き茜に唾を吐きかけた。

（いきなり俺達を連れてきてこんな目に合わせてどういふつもりなんだ。自分だってそんな怪我しちゃって……）

ゆっくりとサラの太い腕が茜の胸ぐらを掴み持ち上げていく。

（怪我してまで、俺達を守ろうと……。雪葉だって気を失って。きつと俺を守ろうとして）

茜の表情の陰しさが増す。

（俺は自分から誰かと関わりになんてなりたくないんだっ、どうせ俺なんかまた捨てられる）

持ち上げられている茜は必死に抵抗するも叶わない。

（どうせ俺なんか、俺なんか……こんな俺なんか）

サラの空いている腕がゆっくりと引き絞られていった。

（こんな俺なんか、こんな……）

再び何かを呟くと顔の歪みにより残酷さが増した。

（こんな俺なんか……）

その折にふと茜と千影の目が合う。

（こんな俺は……）

「もういない」

千影は弱弱しく呟いた。

その声にサラは反応し、視線を向ける。

「もういいんだ。こんな俺なんか」

単調に言い放った言葉からは熱を感じない。千影はおもむろに立ち上がると茜を持ち上げているサラに向かって歩き出す。

「何？ あんたから死にたいの？ 殊勝なところがけだね。女よりも先を望むなんて」

千影の行動が面白かったのか、嬉しそうに茜を地面に放り投げると引き絞った腕の標的を千影に変えた。

「じゃあ、あんたから壊れてね」

「やめなっさい……あんたじゃ」

痛みで意識を取り戻した茜が声を振り絞るも千影には届かない。

「あはははっ」

甲高く響くサラの笑い声と共に、弾かれた腕は千影に襲い掛かっていった。

安穩の終わり

千影は自分に辟易していた。自らが傷つかないために人を遠ざけていたのに、今はそれが裏目にでてしまっている。自分の目の前で自分は何もしないまま、千影の前には女子が二人倒れているのだ。もし、自分が自ら関わりを持っていたら、OBSということ隠さず胸を張って生きていたら、もしかしたら今よりも少しは結果は変わっていたのかもしれないのに。

千影がOBSを隠すため人と距離を置いているのには二つ理由があった。一つは自分のOBSとしての脳力を引き合いに母親と生き別れることになったため。もう一つは、そうさせたOBSの脳力を憎み父親が去ってってしまったため。自分の脳力のせいで両親と自分自身が離れ離れになってしまい、OBSである自分自身を憎んでいたのだ。もちろん、OBSと知られると周囲から偏見の目で見られるのは確かだ。しかし、それは主たる理由ではなかった。

千影の前には鬼のような形相の背の高い女が立っている。血管の浮き出た太い腕は自分の顔に向かっていた。その攻撃をそのまま受けければ情けない自分を痛めつけることもできた。しかし、千影は意識的に脳力を使う。目の水晶体の分厚さを尋常ではない範囲で動き、すさまじい勢いで向かってくる腕に焦点を合わせる。

（軌道が丸わかりだな。手がぼろぼろだ。荒れやすいのかな）
顔に風圧を受けながらぎりぎり腕を避ける。

（あ、腕にまた筋緊張が……。この人はわかりやすいな。きっと俺を壊せはしないだろう……）
再び避ける。

自ら痛みに身を投じる勇気もなく、相手が自分に攻撃を当てられないことに対しても不満が募っていく。

（何度も何度も退屈だな。どうせあたらないよ。見えているんだから）

サラの顔の険しさはより一層増し、何度も腕を振るがあたらない。サラの雄たけびは中庭に響いていたが、千影の耳には聞こえない。音のない世界の中で千影はひらりひらりと踊っていた。

いつまでも続くと思われたその世界は突如として終わりを告げる。

「なっ……」

「嘘っ」

踊りを終えた千影は平然とサラの前に立っている。そして、その右手はサラの腹部に突き刺さっていた。

いや、正確に言うと、千影の持っているボールペンがサラの腹部に突き刺さっていたのだ。

「げほっ、が、そんなんっ、馬鹿なことっ」

サラが先ほどまでとは打って変わって、困惑した表情を浮かべていた。

咄嗟に小枝を抜くと、底から多量の血液と肺から漏れる空気の音が聞こえる。

「だめだよ、抜いたら。さっき骨を折ってから中には血が溜まっているんだから。それに肺の穴も開かれて呼吸が苦しくなっちゃうよ」かすかな微笑みを浮かべサラに語りかける千影。その様子を見ていた茜は背筋に寒気を感じていた。

「ほら、穴をふさがないと」

そう言うと、茂みから小枝を取り出しサラに近づく。

「な、なめるな、小僧っ」

呼吸苦と痛みに堪えつつ腕を振るうも千影には届かない。

千影はすり抜けるようにサラの懐に入ると、血が噴出している部分に小枝を再び突き刺した。

「がっ……」

サラはもう声がでなかった。地面に膝を付き力なく崩れ落ちる。その様子を見下ろしていた千影は冷たい笑顔を浮かべながら優しく諭した。

「穴をふさいだから、今から病院にいけばきっと大丈夫だよ。はや

く行きなよ」

そういうと振り返り茜と雪葉のものに向かう。

「ぼっ、まっ、げほおっ」

憎悪に満ちた表情のサラは食い下がるも身体がそれを許さない。

その身体に鞭を打ち立ち上がろうとしたとき、後ろから聞きなれない声が聞こえた。

「サラっ、早く引き上げるぞ。目的は達成している。無駄な遊びはもうやめるんだ」

千影と茜は声のしたほうに目線を向けると、そこには長身で長い銀髪を携えた男が立っていた。

鋭い目つきのその顔はひどく整っており、熱の感じない眼差しは対面するものに恐怖を与えていた。

さっきまで感情を殺していた千影も、その男の迫力に気圧され恐怖を思い出していた。

「柳原っ」

千影の後ろで茜はすさまじい形相でその男を見据えている。

柳原と呼ばれた男はサラに駆け寄ると、すばやく抱きかかえていた。

「ちょっと、待ちなさい。あんたも一緒に捕まえてやるっ」

茜が地面に這い蹲りながら声を振り絞る。千影は恐怖で動けない。

銀髪の男はその声に反応は示すも、早々に無言で立ち去っていった。

「っ……」

男が立ち去ると茜は叫びを飲み込みながら地面を殴りつけ唇を噛み締めていた。

その目には涙が浮かんでいたが、それは千影にしか見えなかった。

「五十川さん、雪葉」

恐怖から解放された千影は二人に近づき声をかける。しかし反応はない。

「五十川さんっ、雪葉っ」

さっきよりも大きな声で、泣いているような声を出した。いや、そんな声しかでなかった。

すると、雪葉はゆっくりと目を開ける。

身体を起こすと、くしゃくしゃの顔になっている千影を見つけ微笑みかける。

「千影様を守ってくださいだったのですね……」

茜は顔を上げないが、肩がかすかに震えている。千影から見て二人の命が無事なのは確認できた。

雪葉の声を聞くや否や、千影の身体も地面に崩れ落ちる。

「千影様っ!？」

あわてて雪葉が駆け寄るも、千影は目を覚まさない。鼻からは血が一筋垂れており、枝を突き刺した右手は切り傷だらけでぼろぼろだった。

その頃、ようやく中庭での異変に気付いた学校の生徒や教師達が駆けつけ、三人の様子を見て救急車の手配をする。

千影は、薄れ行く意識の中で雪葉の声と救急車のサイレンに耳を傾けていた。

現実感はまだ薄いが、今までよりもずっと近くにそれらの声が聞こえる気がしていた。

音が近くにあるからか、千影はとても穏やかな顔をしていた。今まで隠してきた傷を、さらけ出してしまったというのに。

涙の意味

千影が目を開けると、そこには見知らぬ真っ白な天井が広がっていた。目の前が霞んでいるからかここがどこかわからず、咄嗟に上体を起こす。頭を掻きながら周囲を見渡すと同じく白いカーテンがベッドを囲んでおり、ベッドの周りにはテレビや小さめの棚が置かれている。

（病院？）

枕元に自分の名前が書かれた名札が付いており、部屋番号と担当医の名前も書いてあった。千影は自分の予想が正しいのだと知る。

「そっか。無事だったんだな……俺」

唐突に蘇ってくる恐怖の記憶に身震いすると、それを振り払うかのように頭を横に振った。

しかし、身体の奥底から沸き起こってくる寒気は振りほどけない。（くそっ、なんだよ。もう俺は自分のことなんかどうだっていいって思ったんじゃないのかよ）

寒気の根源は、サラの圧倒的な暴力だけではなかった。今まで自分の運命を翻弄してきたOBSの脳力もそこには含まれている。

今まで居場所を作るために必死で隠してきたOBSという自分の中の汚点。それをさらけだしてしまった今、長い時間をかけて作り上げたものが、突如として舞い込んできた繋がりが、自分にとって尊いもの全てがなくなってしまうような感覚に千影は陥っていた。

（また、一人か……）

その予感を受け入れると楽になれる。そのことを経験則で知っていた千影は感情に蓋をする。悲しまないように、苦しまないように、荒らげないように……静寂を取り戻した感情はその静けさに身を委ね、しっとりと空気に溶け込んでいった。

「これで、いいんだよな」

自分に言い聞かせるように呟くと、閉じていたはずの涙腺は静かに

開き、目頭に涙が溜まる。

まだ僅かに開いていた感情の隙間から漏れ出る雫が語る言葉を千影はまだ知らない。

頬を伝う雫の後が乾きかけたとき、唐突に病室のドアが開き瞬時に視線を向ける。

「孝明さんっ、そんなに近づかないでくださいますか？ 私に触れていいのは千影さまだけですわっ。ちょっと、ほらっ、私が先入るんです！ 後ろに下がってください！」

「いいじゃんか、雪葉ちゃん！ 俺は千影の友達よ？ 愛しの千影の友達なんだから、同じように俺のことを慕ってくれていいんだから。ねっ！？ だから一緒に並んで入ろうっ」

「何を仰っているんですか！ 私にとって千影様は特別な存在なのです。一緒にされては困りますわっ」

「はいはい。そんな照れないでも。って、千影起きてるじゃん！ よお、調子はどうだ！？」

「えっ、千影様っ！？ ……ああ、やっと目を覚ましてくださったのですね……。ご無事で何よりです。ずっと寝ていらしたから雪葉、胸が張り裂けそうでしたわ」

けたたましく病室に入ってきた雪葉と孝明は、目を覚ました千影の姿を見るや否や急ぎ足でベッド脇まで近寄る。

雪葉は感極まったのか、目に涙を溜めて千影の手を強く握った。

「二人とも、なんで……」

その二人の様子に呆けた表情をしていた千影は、不思議そうに二人の顔を交互に見つめる。

「ああ、雪葉ちゃんとは病室で何度も会ってるうちに仲良くなったんだよ。もう照れ屋でさ。一緒に住むことになってるんだろ？ 羨ましいな、ほんとにっ」

「仲良くだなんて。誤解しないでくださいね。千影様。私がお慕いしているのは千影様だけですっ。それはそうと、目を覚まされて元氣そうで何よりですわ。本当に心配したんですのよ」

二人は同時にしゃべりだす。そのことに孝明は喜び、雪葉は怒り、言い合いをしては千影に対して話しかける。その様子を千影は理解できなかった。

「いや、そういうことじゃなくてさっ。どうして二人とも俺なんかのお見舞いにきてくれたんだよっ。孝明なんて俺がOBSだなんて知らなかっただろ？ 何でっ」

千影の叫びに雪葉も孝明も口を閉じ互いに一瞥する。

「なんでってなあ」

「そうですわよねえ」

そういうとまっすぐと千影に向き直り一言。

「心配だからに決まってるだろ——ますわっ——」

当たり前のように言い放たれたその言葉は、千影の頭には一切ない言葉だった。

「心配だからって……。俺はOBSなんだよっ？ 孝明は気持ち悪くないのか？ 雪葉だって……。平然と人を刺したんだ。怖がって当然じゃないかっ!？」

下を向いて大きな声を上げている千影をみて、二人は優しく微笑んだ。

「何言ってるんだよ。千影。お前はOBSだろうが千影だろ？ 俺だって馬鹿みたいなアイドルオタクなわけだし、皆に避けられてるけどお前はそんなの関係なしに向き合ってくれてるじゃないか。いまさらそんなの。気にするだなんて思ってたよ」

「そうですわよ。千影様。千影様は危険を顧みず、私達を助けてくださったのです。それがどんな手段であれ、私は感謝こそすれ怖いだなんて思いませんわ。本当にありがとうございました。そして、こうしてまたお話できて嬉しいですわ」

言い終わった後も変わらず柔らかい微笑みを千影に向けている二人。先ほどもとは違う色の雫が千影の視界を埋める。

「孝明も雪葉も、変わってるよ。変わってる……」

くしゃくしゃになった顔を隠すように千影は下を向く。そこには感

情の蓋など姿かたちもなく取り払われた少年がいた。

窓の外は雲一つない青空が広がっている。4月の穏やかな空気は病室を包み、少年の心を包んでいく。その温度は心地よく暖かい。少年は心に直接触れるその温度に戸惑いつつも、居心地のよさにその身を委ねていった。そこを居場所と呼べる日がくるのを、心の底から願っていた。

雪葉の懸念

「あんた何にもしらないのねっ」

茜は動かない身体を跳ねさせながら千影に向かって目を見開いた。

その異様な剣幕にたじろぎつつも、千影は必死になって食い下がる。

「だって、ずっと昔からOBSについては関わらないようにしていたから……」

「っ……。それにしたって知らなすぎよっ！なんでこんなやつに……」

茜は悔しそうに歯を軋ませる。後ろにいる雪葉もさすがに庇いようがないのか、手を口に当てて咳払いをしていた。

「千影様、ゆっくりでいいので私が手取り足取り教えて差し上げますわ。しょうがないですわよね、知らないものは知らないんですものっ」

「それにしたって自分の脳力名すら知らないだなんてどういうことよっ。ちゃんと診察受けてるわけ！？真面目にOBSについて勉強してる自分が馬鹿みたいっ」

茜はそう言うのと病室のベッドの中にもぐりこんでしまった。それを見て、千影と雪葉は顔を見合わせて苦笑いをうかべる。

今、千影と雪葉は茜が入院している病院に見舞いに来ていた。中庭での攻防で茜は左腕と右足を骨折しており、その治療のため入院せざるを得なかったのだ。千影は気付いた後すぐに退院し、雪葉も軽い診察のみで開放されたため茜の病室に向かったのだが、茜の希望で面会は叶わなかった。手術後、落ち着いた後にしてほしいとの伝達を聞き、事件から1週間後の今日、やっとお目通りが叶ったのだ。

「それにしても思ったより元気そうでよかった。あれから学校は大騒ぎだったみたいでさ。孝明が誤魔化しておいてくれたお陰で助かったよ」

「そうですわね。孝明さんのお陰で私達は巻き込まれたということになったんですもの。どっかのだれかさんが、無理やり首を突っ込んで揉め事を起こしたなんて分かれれば、それなりの罰を受けたに決まっていますわ」

その言葉を聞き茜は布団をめくり鋭い目つきで雪葉を睨みつける。

「っ！」

「でも……、そのどっかのだれかさんがいなかったら私はもっとひどい怪我をしていました。そればかりか命の危険だって。だから私はその方に言いたいことがあって今日は来ましたの。庇って下さったことは、本当にありがとうございます」

言い返そうとしていた茜が、思いもよらない台詞に勢いを失う。雪葉をみると、視線を天井に外しながら怒ったような顔をして顔を紅潮させていた。

それを見た茜は気まずそうに再び布団にもぐりこむ。

「五十川さん、本当に雪葉は感謝しているみたいなんだ。自分の脳力の過信のせいで、五十川さんに怪我をさせたって……。それと……、俺も感謝してる。五十川さんのお陰で、俺は少しでも前に進めた気がするんだ。五十川さんにも雪葉にも、すごい迷惑かけたけど、あの時助けてくれてありがとう。そして、そんなためな俺でも、今こうしてまた向き合ってくれて本当にありがとう」

千影はゆっくりと穏やかに言葉を紡ぐ。

「二人とも馬鹿じゃないの。同じOBSなんだから助けて当たり前でしょっ！ そんなこと言ってる暇あったらもっとOBSのこと勉強したらどうなのよっ。馬鹿……」

布団をかぶりながら発する声は箆ってしまっているけれど、普段のようなとげとげしさはなく茜の罵声が本音ではないことを物語っていた。雪葉は千影からの予想外の感謝の言葉に先ほどとは違う赤みを顔に灯らせている。

三人に静寂が訪れる。ゆっくりと、部屋がオレンジ色に染まってきた、暖かさが部屋に染み渡る。いつしかその色は三人を包み込み、

眼差しまでも穏やかに変えさせた。浮かべる笑みの中に、他の色が浮かび出ることはないけれど、隠したい色を悟られなくて、三人はきつと安堵していることだろう。



「そういえば、二つ気になってることがありましたの。」

しばらく時間が経過した後、雪葉が唐突に切り出した。

「どうしたの、急に。気になることって？」

千影の問いに同意するように、茜もベッドを起こし視線を向けた。

「まず一つ目なんですが、五十川さんのことですね。あなた、警察のOBS特別対策科に所属しているって言ってましたわよね。脳力を持っている人間が対策科に抜擢されることはごく稀にあることだと聞いてはいるのでそれは問題ないのですが……もしかしてあなた、テロ行為があることをあらかじめ知っていたのですか？」

その問いを聞き茜の表情に影が宿る。空いている右手を額に当てるとおもむろに口を開いた。

「知っていたわよ。それがどうしたの？」

雪葉が口角を上げ微笑んだ。

「早すぎると悪態をついていたあなたの様子を見ると、正確な日時には知らされていなかったと考えられます。そして、その曖昧な日時からも離れていた日にテロが行われた。これは、こういうことですよ……」

答えの出ない問いかけに他の二人は口をつぐむ。

「そしてもっとわからないのはテロをされた場所です。この1週間で少し調べたのですが、空の社は仮にもOBSの人権向上を謳っている団体です。その団体が活動を行うのに、どこにでもある高等学校を狙うでしょうか。いえ、効果的にテロ行為を行うのであれば、もっと相応しい場所などいくらでもあります。そうしなかったのはなぜでしょうか……」

「今回のことには別の目的があったってこと？」

千影が考え込むように首を傾げながら雪葉に問いかける。

「ええ。おそらくは。今回のことは不自然なことが多すぎますわ。テロ行為を行うっていうのは思っているよりもかなりリスクの高い行為なんですよ。それを、効果的でもなく目的も定かなじやない場所で行い、情報さえも漏れてしまっている状態だなんて……考えられませんわ」

言葉を終えると雪葉は表情を戒める。

「でもっ、私は4月下旬あたりにうちの学校でテロが行われるってしか聞いてないわよ？ 別の目的があるだなんて話、課の人はなにも……」

「警察は空の社に踊らされている可能性があるってことですわ。今回のことは、別の大きなことの陽動のため、それとうちの学校が狙われたのは……五十川さんという警察戦力の削減が目的だと思います」

雪葉の言い放った目的に、千影の表情は引きつる。茜も動揺が隠せていない。

「その別の大きなことっていうのが私には想像も付かないのですが――」

「そこから先は俺から説明させてもらおうかな」
雪葉の言葉を遮るように病室の入り口から太い落ち着いた声が響いた。

千影と雪葉が振り向くと、そこには長身のがっちりとした体型の男が立っていた。がっちりとはしているが、背が高いせいか足はすらりと伸びている。黒髪の短髪からはさわやかさがにじみ出ており、穏やかそうな顔で三人を眺めていた。

「兄さんっ」

茜が小さく叫ぶ。

「どうもはじめまして。茜の兄です。よろしく」

短く挨拶をすませると、千影と雪葉と並ぶようにして椅子に座る。

「兄さんはOBS特別対策課の刑事なの」
そう妹に紹介された兄は、千影と雪葉に穏やかな微笑みを振りまいていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1676z/>

Brain Syndrome—脳過活動症候群—

2012年1月9日01時48分発行